Q18　言語障害とは

１　言語障害

言語障害とは、話し方に特徴があって聞き手に内容が伝わりにくいため、人間関係や社会生活にも支障が生じやすい、コミュニケーションの障害です。一般的には、言語の受容から表出に至るまでのいずれかのレベルにおいて障害がある状態であり、その実態は複雑で多岐にわたっています。言語機能の成立にかかわる要素は広範囲で、運動機能や思考、社会性の発達などとのかかわりも深く、言語障害を単一の機能の障害として定義することは困難です。しかしながら、具体的にその状態を示すとすれば、その社会の一般の聞き手にとって、言葉そのものに注意が引かれるような話し方をする状態及びそのために本人が社会的不都合を来すような状態のことを言います。

主な言語障害の種類と特徴を紹介します。

＜構音障害＞

一定の音を習慣的に誤って発音する状態。

・別の音に置き換えて発音する。「さかな sakana」→「たかな takana」

・音の省略がある。「ラッパrappa」→「アッパappa」

・発音の歪み、不要な音の付け加えがある。「ツミキリ（積木）」

＜吃音＞

話そうとするときに、最初の音や文のはじめの音の繰り返し、不自然な引き伸ばし、声がスムーズに出ないなど、話すときに流暢に話せなくなる状態。

・はじめの音や言葉を繰り返す。「ぼ、ぼ、ぼぼ、ぼくは・・・」

・音を引き伸ばす。「ぼおーーーくは・・・」

・言葉がスムーズに出にくい状態。「あのー」「さ・・・かな」

＜口蓋裂＞

生まれつき上顎や口蓋が裂けて、口腔と鼻腔がつながっているため、話し言葉に必要な呼気が鼻から抜けたり、喉の奥で癖のある発音をしたりする状態。

＜失語症＞

後天的に脳の局所的破損により、それまで獲得していた言葉をコミュニケーションのために使用できなくなった状態。

２　言語障害の子どもたちの特性

（1）　環境との相互作用が強い面がある

児童生徒を取り巻く人や環境の在り方、生活体験での失敗等が言語障害の状態に大きな影響を与えることがあります。

（2）　見逃されやすい面がある

表面的に表れる障害の程度とは異なり、児童生徒自身が感じている苦しみが予想以上に大きかったり、劣等感、欲求不満などの情緒面への影響も出てきたりします。

（3）　医療との関連がある

口蓋裂等による言語障害の状態の判断については、医師と教育との関連を重視して行われることが必要です。

（4）　発達的な観点を重視する必要がある

言語障害には、発達的にその状態を改善・克服できたり、状態が変化していったりすることもあります。そのため、指導と評価においては、対象となる児童生徒の発達の状態との関連で行われる必要があります。

３　学習場面や、日常生活での配慮・支援

（１）　日常生活や遊びの経験を通して、子どもが楽しみながら声を出すことによって、自然に舌や唇、喉の動かし方を学んでいけるように工夫する。

（２）　構音（発音）練習は、子どもが間違えることを恐れずに、指導者とのやりとりが楽しめるような遊びやゲームを取り入れて行い、日常生活の中で自然なコミュニケーションができるようにしていく。

（３）　理解できる言葉を増やすためには、子どもの気持ちに沿った言葉をかけ、子どもの実態をよく把握したうえで発達段階に応じた学習内容を組み立て、スモールステップで進めていく。

（４）　様々な生活体験を通して獲得した言葉を、わかって使える言葉にしていくためには、指導者や周囲の人々との間で話題を共有したり、経験したことを伝え合ったり、やりとりが活発になされる必要がある。そのため、日頃から周囲の人とのかかわりを喜ぶような人間関係を築いていく。

（５）　言葉を育てる意識をかかわり手である指導者がもつことが大事で、子どもをよく観察し、子どもの会話に耳を傾け、子どもが話し始めるまで待つなどのかかわり方に配慮する。